

でもある。この書はエリウゲナの自筆写本をめぐって展開された、ほぼ一世紀にわたる論争の現時点における到達点を示しているとともに、同氏の校訂の補足説明ともなっている。今氏の報告は、この一世紀におよぶ錯綜した論争の経緯と問題を整理し、われわれに提示してくれた。現存する写本がエリウゲナの真筆であるか否かを決める手がかりは、当該の写本が九世紀のものであることをのぞけば、残された写本の緻密な観察と蓋然的な推論の積み重ね以外にはない。今氏の報告は、その要点を手際よく整理したものであるとともに、今後の問題を照射するものともなった。会場からも重要な問題提起がなされた。エリウゲナではないと判定された筆写者の加筆や訂正はどのような意味をもつのか。またエリウゲナ自身の加筆訂正はなぜなされたのか、あらたに校訂されたテキストは従来のエリウゲナ理解に変更を余儀なくさせるものなのか、興味は尽きない。写本研究から得られた知見が、思想解釈にどのような影響を及ぼすか及ぼさないかは今後解明されるべき重要な課題である。思想解釈にかかわる問題については、残されたテキストの「全体」と照合しつつ、新たな説明が醸成されてゆくであろう。思想解釈は個々のテキストの読みに依存するというよりむしろ、残されたテキストの理念的な「全体」にかかわる。この意味で思想解釈は、個々のテキストの異同からはある程度の中立を保っていると考えられるからである。エリウゲナ研究のいっそうの発展を待ち望む。

特定質問

小 浜 善 信

エリウゲナの自筆写本をめぐって、我が国を代表するエリウゲナ研究者である今義博氏によってなされた今回のご報告は、古文書学という学問の魅力と、あたかも謎解きに挑むかのように古文書の真相に迫ろうとする学者たちのたゆまぬ探究精神とを、簡潔に且つ迫真に満ちた仕方でも伝えてくださるものであった。テキストに基づくわれわれの哲学・神学研究が、少なからず古文書学者たちのそうした地道な努力に支えられていることも改めて実感された。

さて、20世紀初頭、ドイツの古文書学者L.トラウベによって提起された「エリウゲナの自筆写本」問題は、かれの弟子E.ランドに引き継がれ、さらにB.ピシヨッフ

および T. ビショップもその解明に加わり、試行錯誤を経た後に E. ジョノーによって最終的な決着をみたという。

その結果、従来基本テキストとみなされてきた I. P. シェルドン・ウィリアムズによる校訂版『ペリピュセオン』は、エリウゲナ自身の手による書き込みだけではなく、エリウゲナ本人ではない筆写者の手によるそれも混入したものであることが明らかになり、従って、それは基本テキストの意味を失うことになったという。

そこで、そのご報告に対する私の質問は次のとおりである。

E. ジョノーの研究成果に基づく校訂版『ペリピュセオン』刊行によって、おそらく、シェルドン・ウィリアムズによる校訂版『ペリピュセオン』に基づいてなされたエリウゲナ研究のいくつかは、その研究自体が無意味になったと思われるが、エリウゲナ研究について、さらにはエリウゲナの思想自体について、どの程度まで、あるいは具体的にどのような点が修正・変更を迫られたのか。

たとえば、実際はそうではなかったということを E. ジョノーによる校訂版は明らかにしたわけであるが、従来、エリウゲナはニュッサのグレゴリオスとナジアンゾスのグレゴリオスを混同していたとみなされてきた。この前提に立っての議論・研究は徒労であったことになると思われるが、他に何かこれに類する議論・研究があるのか。さらには、もっと根本的に、E. ジョノーによる校訂版には、エリウゲナの根本思想（「創造するが、創造されない自然」「創造され、創造する自然」「創造されるが、創造しない自然」「創造せず、創されもしない自然」）の解釈に変更を迫るような新たな知見が含まれているのか。

また、エリウゲナ以前の思想伝統との関連についていえば、かれの思想と新プラトン主義あるいは擬ディオニュシオスとの関係についての解釈に何か見直しを迫る事態が生じたのか。とくに、エリウゲナには、それだけを取り出してみると、たしかに「汎神論」という嫌疑を受けかねない文章が見られるのであるが、この点に関してはどうか。

さらに、エリウゲナ以後の思想伝統との関連についていえば、かれの思想とドイツ観念論哲学、とくにヘーゲル哲学との関係についての解釈に見直しの必要性あるいは新たな展望が生じたのか。たしかに、エリウゲナの思想のなかにヘーゲルの哲学を読み込むことは時代錯誤であろうが、ヘーゲルの哲学のなかにエリウゲナの思想の影響を見ることは決して的外れではないであろうから。

そして、日本でエリウゲナ思想をもっとも高く評価していた哲学者は西田幾多郎であった。とくに、「創造するが、創造されない自然」と「創造せず、創造されもしない自然」とが同一のものである、すなわち神は作出因であると同時に目的因でもあるとするエリウゲナ思想、また、「止まれる運動、動ける静止」といったようなエリウゲナの弁証法的思惟は、西田が自らの根本思想を述べるさい、共感をもって言及されるのであるが、その西田のエリウゲナ解釈について、また西田の思想とエリウゲナのそれとの関係について、何か見直しを促す新たな状況が提示されたのか。

特定質問

八 卷 和 彦

1000年以上も前の思想家の肉筆に出会えること、それも今氏が長年にわたり研究対象としてきている人物の肉筆が確定されて、それを目の当たりにすることの感慨には、格別なものがあるだろうことは想像に難くない。この事実の確定に到るトラウベやジョノーらの先行研究にも、同じような感慨が動力因として働いていただろう。先行研究を踏まえながら、骨の折れる文献学的研究にまい進する今氏の姿には敬服の念の禁じえない。以下に門外漢による三点の質問を提出したい。

- (1) エリウゲナの筆跡と認められるに至った当該写本の欄外加筆を考慮した場合に、例えば Periphyseon において、原文の思想と加筆後の思想との間に何らかの変化が見出されるのか。もし見出されるとしたら、どのような変化か。
 - (2) エリウゲナの写本の中世における流布・保存の状況にいかなる特徴が見出されるか。1225年に教皇ホノリウス三世がエリウゲナ思想を批判して「異端」宣告をしたようだが。
 - (3) 上の(2)と関わって、エリウゲナ思想の中世における位置はいかなるものであったか。
-